

日本語の時制辞の獲得に関する今後の研究課題

桂 恵梨奈*・伊藤 友彦**

支援方法学分野

(2014年9月30日受理)

1. はじめに

時制辞などの文法形態素の獲得に関する古典的な研究として、Brown (1973) が知られている。この研究は、MLU (Mean Length of Utterance) で統一した英語を母語とする1歳から2歳の幼児3名の縦断データを用いて、言語獲得の初期段階に高頻度で出現するとされる14の文法形態素を分析している。Brown (1973) はこれらの文法形態素が3名の幼児において、獲得の時期については差があるが、ほぼ同一の順序で出現したと述べている。

時制辞 (T) などの機能範疇は、定型発達児の統語発達に重要な役割を果たすことが指摘されている (Radford, 1990)。近年欧米においては、時制辞の獲得に関する研究が活発に行われている。最近では、定型発達児を対象とした研究のみならず、特異的言語発達障害 (Specific Language Impairment: SLI) 児など言語発達遅滞児を対象とした研究も行われている。

英語における時制辞の獲得に関する研究においては、幼児が、しばしば時制辞 (例: -ed) を脱落させ、語幹のみの形態を産出する現象が取り上げられてきた。しかし、日本語は、動詞が語幹のみで産出されることが形態的に許されていない。三原 (1994) は、文が独立文として存在するためには、タ形で示される過去 (例: 食べた) やル形で表される非過去 (例: 食べる) 等の時制を明示する要素を含んでいなければならないと述べている。したがって、日本語の時制辞の獲得研究においては、英語のように時制辞の有無を検討するのではなく、ル形とタ形などの時制辞の出現に着

目することになる。しかし、日本語の時制辞の出現に関する研究は、定型発達児についても十分に行われていたとはいえない。

本稿ではまず、欧米における時制辞の獲得に関する研究を、定型発達児を対象としたものと言語発達遅滞児を対象としたものとに分けて紹介する。次に、日本における時制辞の獲得に関する研究を、動詞のル形とタ形の出現に着目して概観する。最後に日本における時制辞の獲得研究の今後の課題を述べる。

2. 欧米における時制辞の獲得研究

2. 1 定型発達児について

欧米においては、英語、フランス語、ドイツ語などを母語とする幼児が、本来ならば屈折を伴って用いられる主文動詞に屈折を伴わない動詞形、いわゆる不定形 (infinitive) を用いることが指摘されており、RI (Root Infinitive) 現象と呼ばれている。英語圏においては、幼児が、規則動詞の過去形 (-ed) や、三人称単数現在形 (-s) のような時制を表す文法形態素を、正しく使用できるようになっても、しばしば脱落させることがある。このように、正しい屈折と不定形がどちらもみられる段階はOI (Optional Infinitive) 段階として説明されている (Rice, Wexler & Cleave, 1995)。

Rice, Wexler, and Hershberger (1998) は、定型発達児とSLI児を対象として、時制辞について縦断的に検討している。その結果、定型発達児においては、3歳から4歳の間で義務的な文脈での時制辞の使用が確立し、4歳を過ぎると正しい使用が95%を超え、安定す

* 東京学芸大学教育学研究科特別支援教育専攻
** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

るとしている。Rice et al. (1995) においても平均年齢3歳の群では、自然発話における正しい時制辞の使用が、50%前後であったのに対して、平均年齢5歳の群では、およそ90%であった。このことから、5歳以降は時制辞がほぼ安定して用いられていることがわかる。

規則動詞において時制辞が安定して用いられるようになる頃、過去を表す文法形態素を不規則動詞にも過剰使用する誤用がみられることが英語やドイツ語においては従来から指摘されている (Marcus, Pinker, Ullman, Hollander, Rosen & Xu, 1992; Clahsen and Rothweiler, 1993)。

Clahsen, Aveledo, and Roca (2002) は、スペイン語を母語とする幼児15名を対象に自然発話とナラティブの縦断データを分析した結果、時制を標示することが可能になった後で、時制辞を不規則動詞に過剰使用する誤用がみられたと報告している。

Say and Clahsen (2002) によれば、イタリア語を母語とする幼児においても動詞の規則形に付加されるべき時制辞を、不規則形に過剰適用する誤用がみられるとしている。

Stavarakaki and Clahsen (2009) は、ギリシャ語を母語とする3歳から9歳の幼児154名を対象に、産出課題と正誤判断課題を行い、過去完了を示す-sが、-sを必要としない不規則形の動詞にも過剰使用されることを明らかにした。

以上のように、欧米における研究では、定型発達児の時制辞などの獲得過程において、不定形の産出や過剰使用の誤用がみられることが報告されている。

2. 2 言語発達遅滞児について

Rice et al. (1995) は、先に述べたOI段階が、SLI児においては長期にわたってみられることに対する説明として、EOI (Extended Optional Infinitive) 仮説を提案している。

Roberts, Rice and Tager-flusberg (2004) は、Rice et al. (1995) において、SLI児の特徴を説明するために用いられたEOI仮説が、自閉症児にも当てはまるかどうかを検討するため、自閉症児62名を対象に時制辞の産出課題を行った。その結果、自閉症児の中には、時制辞を頻繁に脱落させるサブグループが存在することが示された。

Rutter and Buckley (1994) は、1歳0ヵ月から3歳2ヵ月までの12名のダウン症児を対象に縦断研究を行い、文法形態素の出現順序をBrown (1973) の定型発達児と比較している。その結果、ダウン症児は定型

発達児に比べて遅れはあるものの、定型発達児が初期に獲得した6つの文法形態素はそのほとんどを初期に獲得した。しかし、この6つの文法形態素の獲得順序は、Brown (1973) が示した順序とは異なっていた。また、三人称単数現在形 (-s) は観察期間中には12名とも一度も観察されなかった。

Brown (2005) は、時制辞がダウン症において障害されているかどうかを検討するために、MLUで統制したダウン症児7名と定型発達児7名の自然発話を分析した。その結果、時制辞については、ダウン症児の方が定型発達児よりも多く脱落し、時制辞以外の文法形態素については、両者の間に有意差がなかった。Brown (2005) はこれらの結果は、ダウン症児は時制辞の獲得に選択的な障害を示すという仮説を支持すると指摘している。

一方、Ring and Clahsen (2005) や Stathopoulou and Clahsen (2010) のように、ダウン症児は時制辞に選択的な障害があるとは結論づけていない研究もある。

このように、欧米においては、定型発達児の時制辞の獲得に関する研究に基づいて、言語獲得に遅れを示す子どもが、時制辞の獲得に困難を示すかどうかを明らかにするための研究が行われている。

3. 日本における時制辞の獲得研究

3. 1 ル形とタ形の出現順序について

先に述べたように、語幹のみの形態が許されない日本語において時制辞の獲得を研究するためには、動詞のル形とタ形の出現に着目する必要があると思われる。そこで、以下では、動詞のル形とタ形の出現順序に視点を当てて従来の研究を紹介する。

3. 1. 1 言語発達全体を対象とした従来の研究

村田 (1961) は、要求語の発達を検討することを目的に、1歳台の幼児2名の自然発話データを分析している。この研究において動詞のル形とタ形の出現に着目すると、1名はタ形が1歳8ヵ月、ル形が1歳9ヵ月に観察され、もう1名はタ形が1歳7ヵ月、ル形が1歳8ヵ月に観察されたことがわかる。しかし、この研究では要求の意味以外で用いられた動詞のル形やタ形がこれ以前に観察されていた可能性を否定できない。

大久保 (1967) は、幼児1名を対象とした研究を行っている。動詞の語形変化の発達を示した表から、タ形とル形がともに1歳7ヵ月に出現していることがわかる。しかし、この研究では1歳6ヵ月からの

データを対象としているため、タ形とル形の正確な出現時期についての情報は得られない。

岩淵・村石(1968)は、幼児4名の発話を記録している。各幼児における正確な初出は検討できないが、動詞については、「アツが出たあとに、アルが出た」という記述がみられる。

中西(1968)は、1歳0ヵ月から1歳8ヵ月までの幼児20名を、それぞれ縦断的に観察している。その結果、1歳4ヵ月にタ形「あった」が幼児3名について観察され、1歳6ヵ月にル形「ある」が幼児2名について観察されたとしている。しかし、20名の結果が全て同一の表にまとめられているため、各幼児についてのル形とタ形の出現時期は明らかにされていない。

藤原(1976)は、幼児10名の一語発話期からの縦断研究を行い、1ヵ月ごとに対象児10名における代表的な発話例を整理している。そのうちの1名に着目すると、1歳6ヵ月にタ形が、1歳7ヵ月にル形がみられる。しかし、ル形とタ形の出現に着目した記述はみられないため、この研究においてもル形とタ形の出現順序についての正確な情報を得ることはできない。

野地(1977)は、幼児1名を1歳以前から観察し、全ての発話を記録している。これによれば、タ形は1歳1ヵ月、ル形は1歳11ヵ月に観察されている。

小村(1977)は、幼児5名の縦断データのうち3名のデータを中心に、存在文の代表として「ある」を、一般動詞文の代表として「する」を対象として動詞の発達について分析している。その結果、「ある」については、1名はタ形が1歳5ヵ月、ル形が1歳7ヵ月に観察され、もう1名は、ル形とタ形がともに1歳4ヵ月に観察された。残りの1名はどちらも1歳10ヵ月に観察されている。「する」については、タ形とル形がそれぞれ1歳5ヵ月、1歳7ヵ月に、もう1名は、1歳3ヵ月、1歳6ヵ月に、残りの1名は、1歳7ヵ月、1歳10ヵ月に観察されている。この研究は、全ての動詞をとりあげているわけではないため、タ形とル形の初出は確認できないが、動詞ごとにル形とタ形の出現順序がわかる。

大久保(1984)は、「幼児のこぼし資料(1)(3)(4)(5)」(国立国語研究所, 1981, 1982a, 1982b, 1983)を用いて、「動詞とその下接語」の獲得過程について述べている。それによれば、タ形「あった」が1歳0ヵ月に観察されたのに対し、ル形「いく」が1歳7ヵ月に観察されている。

以上のように、日本語の獲得については、従来から記述的な研究がいくつか行われている。それによる

と、タ形が早期に出現し、ル形がそれに続く傾向がうかがわれる。しかし、言語発達全体に視点を当てた従来の縦断研究は、ル形とタ形の出現に着目したものではないため、両者の出現順序については不明な点が多い。

3. 1. 2 ル形とタ形に視点を当てた最近の研究

最近の縦断研究においては、動詞のル形とタ形の出現に着目した研究が行われている。中谷・村杉(2009)は、幼児1名を対象として0歳1ヶ月から1歳9ヵ月までの縦断研究を行っている。その結果、1歳3ヵ月にタ形「ついた」が観察されてから、1歳6ヵ月までに観察された動詞の形態は、全てタ形であったと報告されている。ル形については、「よむ」が1歳7ヵ月に初めて観察されている。

Murasugi and Fuji(2009)では、野地(1977)の幼児1名の縦断データを分析している。この研究ではタ形が1歳6ヵ月に頻繁に観察されるようになってから、1歳7ヵ月までの1ヶ月間に出現した動詞のほとんどがタ形であり、ル形が観察されなかったことから、言語獲得初期にタ形のみが観察される段階があることが指摘されている。ル形については、1歳11ヵ月から2歳1ヶ月に見られる次の段階で、他の動詞の形態とともに観察されている。

桂(2013)は、幼児4名の一語発話期からの縦断データを分析している。その結果、4名中2名は、タ形がそれぞれ、1歳3ヵ月、1歳5ヵ月と早期に初めて観察され、ル形はその後それぞれ、1歳9ヵ月、1歳8ヵ月に初めて観察された。残りの2名は、観察開始時点でタ形が既に観察されていたため、初出の確認はされていないが、一語発話の段階でタ形のみが観察されていたことから、タ形がル形よりも早期に出現した可能性があるとは指摘されている。

團迫(2010)は、動詞に接続される形式にどのような獲得順序が存在するのかを検討するために、幼児の発話データベースであるCHILDES(MacWhinney, 2000)を用いて、Aki(1歳5ヵ月から)Ryo(1歳3ヵ月から)の発話データ(Miyata, 2004a, 2004b)を分析した。その結果、時制辞について、Akiは「タ形がル形よりも早く現れている」とし、Ryoは「ル形とタ形が同時期に現れている」としている。

多数の幼児を対象に、横断研究を行っている研究もある。小椋・中・山下・村瀬・マユ(1997)は、4ヵ月検診、1歳半検診において健常と認められた計60名の幼児を対象に、19分間の自由遊び場面での発話を収集した。その結果、12ヵ月児の動詞の形態と

して「あった」「でた」の「た」を記録している。ル形とタ形の出現順序については言及していないが、12ヵ月という言語獲得の非常に早期の段階でタ形が出現していることがわかる。

安宅・伊藤 (2013) は、動詞のタ形とル形、テイル形、否定形について、その出現順序を検討している。1歳9ヵ月から2歳11ヵ月の幼児95名を対象に、誘導産出課題を実施し、各形態を使用した対象児の割合と使用パターンを算出した。その結果、動詞のタ形は最も年齢の低い1歳9ヵ月からの群で全ての対象児が使用していた。また、4つの形態のうち1つのみを産出したパターンは、タ形を産出した場合のみであった。以上の結果から、安宅・伊藤 (2013) では、タ形が初めに獲得されるのではないかと推察している。

このように、ル形とタ形の出現に視点をあてた最近の研究の多くは、タ形の出現がル形よりも早いことを示している。しかし、ル形とタ形の出現順序についての結論はまだ得られていない。

3. 2 ル形とタ形の出現に関する理論的研究

動詞のル形とタ形について、近年言語理論を踏まえた研究が行われている。以下では、日本語の時制辞の獲得に関する理論的研究を紹介する。

3. 2. 1 タ形が無標の形式かどうかについて

Murasugi and Fuji (2009) は、言語獲得初期に動詞と屈折要素の結合 (Merge) がまだ可能でない段階があることを仮定している。この段階では、日本語のように語幹のみの動詞の形態が許されない言語においては、無標の形態が選ばれ、Murasugi and Fuji (2009) は、その候補として動詞のタ形をあげている。

無標の形式としてタ形が選ばれることについて、Murasugi, Nakatani, and Fuji (2010) は、日本語の成人文法の観点から、4つの証拠をあげている。まず、タ形が埋め込み文にみられることである。例えば、Abe (1993) にみられる「帽子をかぶった人」はその人が「過去に帽子をかぶった」という解釈よりも、「今帽子をかぶっている」と解釈される。次に、タ形が強い命令形として使われることである。例として「さっさと帰った! 帰った!」があげられている。さらに、「行ったり来たりで大変だ」と現在のことを言う場合も、「行ったり来たりで大変だった」と過去のことを言う場合と同じく、ル形ではなくタ形の使用がみられる。最後に「もしも私が家を建てたなら、小さな家を建てただろう」のようにタ形が、未然の事柄を表す例も提示されている。以上に加えて中谷・村杉 (2009) は、「書い

た」「書く」のパラダイムにみられるように、タ形が語末の形態素として「た」で表れることが多いのに対して、ル形は「る」で表れにくいことを指摘している。

3. 2. 2 時制辞と主格の関係について

「日本語の主格は時制辞によって認可される」という仮説が、言語学の基礎的な文献 (三原, 1994) に紹介されている。Matsuoka (1999), 團迫 (2010), 安宅・伊藤 (2012) はこの仮説を踏まえて研究を行っている。

Matsuoka (1999) は、幼児3名の縦断データを分析し、主格標示された名詞句と時制辞の出現時期を検討した。その結果、いずれの対象児においても時制辞の方が主格標示された名詞句よりも早期に観察された。Matsuoka (1999) はこの結果が、時制辞が主格を認可するという仮説を支持すると結論付けている。

團迫 (2010) は、動詞に接続される形式とガ格名詞句の獲得との間にどのような関係があるのかを検討するために、幼児2名の縦断データを分析した。その結果、2名ともル形とタ形の出現後にガ格が観察された。しかし、ある段階までは主格が与えられる名詞句が限定的であることから、形態的には時制辞が早期から現れているが、範疇素性の時制辞 (T) がまだ指定されていない段階があることを指摘している。

安宅・伊藤 (2012) は「時制辞が主格を認可する」という仮説を踏まえ、主格標示された名詞句 (「が」を含む句) は獲得過程において時制辞よりも早く出現することはないと予測している。この予測をもとに、幼児7名の縦断データを分析した結果、7名とも、動詞のル形とタ形の両者が出揃った後に、格助詞の「が」が観察された。この結果から動詞のル形とタ形の両者が出現することが日本語の時制辞の発現に関わっていると考察している。

3. 2. 3 RI現象が日本語においてもみられるかどうかについて

ここでは、欧米の言語においてみられるRI現象と類似した段階が、日本語においてもみられるかどうかを検討した研究を紹介する。

加藤・佐藤・竹田・見吉・酒井・小泉 (2003) は、日本語の動詞は必ず屈折を伴った形で用いられるため、もしRIにあたる現象が日本語にも存在するとすれば、時制の屈折の誤用として現れる可能性があるかと予測している。その予測を検証するために、幼児2名の縦断データを分析した結果、非過去形、過去形ともにほぼ適切に使用されていた。しかし加藤ら (2003)

は、誤用もわずかにみられたことから、日本語にRI現象がないと結論づけることをせず、この研究で対象としている年齢以前（2歳以前）のデータに誤用がみられるかどうか分析する必要があるとしている。

先に示したMurasugi and Fuji (2009)においては、RI現象は特定の言語のみにあらわれる現象ではないとし、日本語においてもRIと類似した段階、RIA (Root Infinitive Analogue) の段階が存在すると提案している。この提案をうけて中谷・村杉 (2009) は、日本語においてRIAが存在するとした場合、早期に出現する動詞のタ形がこの段階で選ばれる動詞の形態であるという可能性を指摘している。さらに、中谷・村杉 (2009) は、RIAが終焉をむかえるのは、動詞のル形が出現してきたころがその兆しであると指摘している。

4. 日本における時制辞の獲得研究の今後の課題

これまで述べてきたように、日本においては、時制辞の獲得に関する研究が、定型発達児についても十分に行われているとはいえない。以下では、日本における時制辞の獲得に関する今後の研究課題を述べる。

1) タ形が無標の形式かどうかの検討

先に述べたように、Murasugi and Fuji (2009) およびMurasugi et al. (2010) は言語獲得初期にル形ではなくタ形のみがみられる時期があることから、この時期にタ形が無標の形式として選ばれていると仮定している。3節で紹介した日本における従来の研究からは、動詞のタ形がル形よりも早期に出現する傾向がみられる。しかし、タ形が早期に出現するかどうかについての一致した知見を得るには至っていない。一語発話期からの縦断研究をさらに蓄積していくことが望まれる。また、知的障害児の初期の言語獲得は、定型発達児に比して遅れるということを除けば、定型発達児と類似しているといわれている (伊藤, 1998)。よって、知的障害児など一語発話期の言語発達遅滞児における検討もタ形が早期に出現するかどうかについての情報を与えてくれると思われる。これらの研究結果は、Murasugi et al. (2010) における、タ形が無標の形式であるという仮説の妥当性の検証に寄与するであろう。

2) 主格標示が段階的に行われるかどうかの検討

3節で示したように、團迫 (2010) は、時制辞と主格の出現時期を検討し、主格標示に関して3つの段階

をあげている。Stage I は、時制辞が用いられるようになるが、ガ格は形態的に現れない段階である。Stage II は、屈折形式が豊かになりガ格が現れるが、主題と解釈される名詞句に対してのみ標示される段階である。Stage III は、成人と同様に意味役割の種類に関係なく主格標示がなされる段階である。この仮説の妥当性を検証するための研究が必要であると思われる。定型発達児においてこの3段階がみられることが明らかになれば、言語発達遅滞児の言語指導のための指標の1つになるとと思われる。

3) RI段階に対応する時制辞の誤用がみられるかについての検討

3節で述べたように、加藤ら (2003) は、日本語にもRIに対応する現象として時制辞の誤用がみられるかどうかを検討している。その結果、時制辞のほとんどが正しく使用されるがわずかに誤用がみられるとしている。しかし、この研究では、わずかにみられた誤用が欧米におけるRI現象と対応しているとは結論づけていない。よって、加藤ら (2003) でも指摘されているように、2歳以前からの縦断的なデータを用いて時制辞の誤用を検討し、日本語においてもRIに対応する段階がみられるかどうかを検討する必要があると思われる。

4) ダウン症児や自閉症児における時制辞の獲得についての検討

2節で述べたように、英語圏においてはSLI児のみならずダウン症児や自閉症児が時制辞を脱落させることが指摘されている (Brown, 2005; Rice et al., 1995; Roberts et al., 2004)。日本語においては、SLI児が時制辞の誤用をみせることが産出課題や正誤判断課題の結果から報告されている (Fukuda and Fukuda, 1999; Ito, Fukuda, Fukuda, Otomo, Fujino & Yamaguchi, 2008)。では、日本語を母語とするダウン症児や自閉症児にも時制辞の誤用がみられるのだろうか。その点についても今後検討が必要であると思われる。

5) 形容詞や判定詞の時制辞の獲得に関する検討

これまで本稿では、動詞における時制辞の獲得に関する研究を紹介してきた。しかし日本語における述語は動詞の他に、形容詞、判定詞が時制によって変化するといわれている (寺村, 1982)。したがって、形容詞と判定詞における時制辞の獲得に関しても、出現順序や誤用の観点から検討される必要があると思われる。

文 献

- Abe, Y. (1993) Dethematized subjects and property ascription in Japanese. In Lee, C & Kang, B (Eds.), *Language, information and computation, Proceedings of Asian conference*, Thachaksa, Seoul, 132-144.
- 安宅涼香・伊藤友彦 (2012) 健常児における時制辞の発現と格助詞「が」の出現との関係—幼児7名の縦断データの検討一. *音声言語医学*, 53, 144-147.
- 安宅涼香・伊藤友彦 (2013) 言語獲得初期の典型発達児における動詞の形態論的側面の獲得. *音声言語医学*, 54, 174-178.
- Brown, M. (2005) Optional infinitives in Down syndrome. Massachusetts institute of technology, September 13, 2005. <http://www.riverbendds.org/brown.html/> (Retrieved April 17, 2014).
- Brown, R. (1973) *A First Language: The early stages*. Harvard University Press, Cambridge, 247-298.
- Clahsen, H., Aveledo, F., & Roca, I. (2002) The development of regular and irregular verb inflection in Spanish child language. *Journal of Child Language*, 29, 591-622.
- Clahsen, H. & Rothweiler, M. (1993) Inflectional rules in children's grammars: Evidence from German participles. *Yearbook of Morphology 1992*, 1-34.
- 團迫雅彦 (2010) 獲得初期段階における未指定の機能範疇—日本語の時制辞と主格の獲得から, 九州大学言語論集, 31, 145-157.
- 藤原与一 (1976) 幼児の言語表現能力の発達—「わが子のことば」を見つめよう—. 文化評論出版.
- Fukuda, E. & Fukuda, S. (1999) Specific Language Impairment in Japanese: A Linguistic Investigation. *NUCB journal of Language, Culture and Communication*, 1, 1-25.
- 伊藤友彦 (1998) 知的障害児の言語—知識・獲得—. 榎田明義・梅谷忠勇 (編), 知的障害児の発達と認知・行動. 田研出版, 37-50.
- Ito, T., Fukuda, S., Fukuda, E., Otomo, K., Fujino, H., & Yamaguchi, Y. (2008) Characteristics of grammatical specific language impairment (G-SLI) in Japanese: A case study. *STUDIES in LANGUAGES*, 44, 53-59.
- 岩淵悦太郎・村石昭三 (1968) ことばの習得. 岩淵悦太郎 (編), ことばの誕生—うぶ声から五才まで. 日本放送出版協会, 109-177.
- 加藤幸子・佐藤友美・竹田夕希子・見吉律子・酒井由美・小泉政利 (2003) "Root Infinitives" 日本語からの検証. 東北大学言語学論集, 12, 113-127.
- 桂恵梨奈 (2013) 言語獲得初期におけるル形とタ形の出現順序—幼児4名の縦断研究. 平成25年度東京学芸大学卒業論文.
- 国立国語研究所 (1981) 2歳・3歳誕生日のことばの記録. 国立国語研究所, 言語教育部資料, 幼児のことば資料 (1).
- 国立国語研究所 (1982a) 1歳児のことばの記録. 国立国語研究所, 言語教育部資料, 幼児のことば資料 (3).
- 国立国語研究所 (1982b) 2歳児のことばの記録. 国立国語研究所, 言語教育部資料, 幼児のことば資料 (4).
- 国立国語研究所 (1983) 3歳前半のことばの記録. 国立国語研究所, 言語教育部資料, 幼児のことば資料 (5).
- 小村晶子 (1977) 言語発達初期における意味関係および動詞モダリティ—について (上). *乳幼児保育研究*, 5, 23-47.
- MacWhinney, B. (2000) *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk, Third Edition*. Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah, N. J.
- Marcus, G. F., Pinker, S., Ullman, M., Hollander, M., Rosen, T. J., & Xu, F. (1992) Overregularization in language acquisition. *Monographs of the society for research in child development*, 228, 57.
- Matsuoka, K. (1999) Studies of the acquisition of syntax and their implications for syntactic theory. 筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書Ⅱ 平成10年度, 331-348.
- 三原健一 (1994) 日本語の統語構造—生成文法理論とその応用. 松柏社.
- Miyata, S. (2004a) Japanese-Miyata-Aki corpus. Talkbank. ISBN 1-59642-055-3, Pittsburgh, PA.
- Miyata, S. (2004b) Japanese-Miyata-Ryo corpus, Talkbank. ISBN 1-59642-056-1, Pittsburgh, PA.
- Murasugi, K. & Fuji, C. (2009) Root infinitives in Japanese and the late acquisition of Head-movement. *Boston University Conference on Language Development 33 Proceeding Online Supplement*, 33, 1-12.
- Murasugi, K., Nakatani, T., & Fuji, C. (2010) The Roots of Root Infinitive Analogues: the Surrogate Verb Forms Common in Adult and Child Grammars. *Boston University Conference on Language Development Proceeding Online Supplement*, 34, 1-12.
- 村田孝次 (1961) 言語行動の発達Ⅲ—要求発話の言語形式ならびに機能の初期発達過程. *教育心理学研究*, 9, 220-229.
- 中西靖子 (1968) 幼児の言語発達. 東京学芸大学紀要, 19, 140-163.
- 中谷友美・村杉恵子 (2009) 言語獲得における主節不定詞現象—縦断的観察的研究. 南山大学アカデミア文学・語学編, 86, 59-94.
- 野地潤家 (1977) 幼児期の言語生活の実態Ⅰ. 文化評論出版.
- 小椋たみ子・中則夫・山下由紀恵・村瀬俊樹・マユアキ (1997) 日本語獲得児の語彙と文法の発達: Clan プログラ

- ムによる分析. 神戸大学発達科学部研究紀要, 4, 31-57.
- 大久保愛 (1967) 幼児言語の発達. 東京堂出版.
- 大久保愛 (1984) 幼児言語の研究. あゆみ出版.
- Radford, A. (1990) *Syntactic theory and the acquisition of English syntax*. Basil Blackwell, Oxford.
- Rice, M. L., Wexler, K., & Cleave, P. L. (1995) Specific language impairment as a period of Extended Optional Infinitive. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 38, 850-863.
- Rice, M. L., Wexler, K., & Hershberger, S. (1998) Tense over time: The longitudinal course of tense acquisition in children with specific language impairment. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 41, 1412-1431.
- Ring, M. & Clahsen, H. (2005) Morphosyntax in Down's syndrome: Is the Extended Optional Infinitive hypothesis an option?. *Stem-, Spraak- en Taalpathologie*, 13, 3-13.
- Roberts, J. A., Rice, M. L., & Tager-Flusberg, H. (2004) Tense marking in children with autism. *Applied Psycholinguistics*, 25, 429-448.
- Rutter, T. & Buckley, S. (1994) The acquisition of grammatical morphemes in children with Down's syndrome. *Down Syndrome Research and Practice*, 2, 76-82.
- Say, T. & Clahsen, H. (2002) Words, Rules and Stems in the Italian Mental Lexicon. In Nootemoom, S., Weerman, F., & Wijnen, F (Eds.), *Storage and computation in the language faculty*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, 93-129.
- Stathopoulou, N. & Clahsen, H. (2010) The perfective past tense in Greek adolescents with Down Syndrome. *Clinical Linguistics and Phonetics*, 24, 870-882.
- Stavarakaki, S. & Clahsen, H. (2009) The perfective past tense in Greek child language. *Journal of Child language*, 36, 113-142.
- 寺村秀夫 (1982) 日本語のシンタクスと意味 I, くろしお出版.

日本語の時制辞の獲得に関する今後の研究課題

Issues for Further Research on Acquisition of Tense Markers in Japanese

桂 恵梨奈*・伊藤 友彦**

Erina KATSURA and Tomohiko ITO

支援方法学分野

Abstract

The purpose of this study was to review research on the acquisition of tense markers, and to discuss the issues for further research in Japanese. First, we presented previous findings on the acquisition of the tense markers in typically developing and language-delayed children in the United States and Europe. Second, studies on the order of appearance of the tense markers '-ru' and '-ta' in Japanese were shown, followed by the theoretical studies on the acquisition of tense markers in typically developing Japanese children. Finally, we proposed several issues which must be investigated for further research in Japanese: 1) whether V-ta forms appear first or not; 2) whether the nominative case is marked step by step; 3) the analysis of tense-marker errors; and 4) the study of the acquisition of tense markers in language-delayed children.

Keywords: acquisition, tense marker, '-ru', '-ta', Japanese

Department of Support Methods for Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本稿は従来の時制辞の獲得に関する研究を概観し、日本語の時制辞の獲得に関する今後の研究課題について論じたものである。初めに、欧米における時制辞に関する研究について、定型発達児と言語発達遅滞児に分けて述べた。次に、日本の定型発達児を対象にした研究について、動詞のル形とタ形の出現順序に関する研究と、時制辞に関係する理論的研究を紹介した。最後に、日本語の時制辞の獲得に関する研究の今後の課題として、1) タ形がル形よりも早期に出現するかどうかの検討、2) 主格標示が段階的に行われるかどうかの検討、3) 時制辞の誤用に関する検討、4) 言語発達遅滞児の時制辞の獲得に関する検討などを提示した。

キーワード: 獲得, 時制辞, ル形, タ形, 日本語

* Graduate School of Education for Children with Disabilities Tokyo Gakugei University

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)